

# —日本の死刑廃止論者—

# 安部 磯 雄

## 目次

一 死刑廃止運動における行実	2
二 その生涯の大略	3
三 余語録	4

## 安形 静男

### (プロフィール)

昭和10（1935）年静岡県生まれ。元・関東地方更生保護委員会委員。元・宮崎産業経営大学法学部教授。ホトトギス同人。更生保護法人更新会参与。

主な編著書に「死刑問題文献目録」（2007年、宮崎産業経営大学法学会）、「社会内処遇の形成と展開」（2005年、日本更生保護協会）、「更生保護関係文献目録」（1990年、日本更生保護協会）、句集「机上の林檎」（2007年、阿蘇叢書）、主な共編著書に「更生保護50年史」（2000年、日本更生保護協会）、「更生保護史の人びと」（1999年、日本更生保護協会）、「静岡県勸善会百年史」（1994年、金原治山治水財団ほか）、「講座少年保護（3）処遇と予防」（1983年、大成出版社）、「保護観察のための処遇ハンドブック」（1977年、文教書院）など。

初出：初出 JCCD 50（1989.10）「日本の死刑廃止論者(1)安部磯雄(1865～1949)」

引用方法：安形静男「—日本の死刑廃止論者—安部磯雄」(CrimelInfo 2024年)。

安部磯雄の名は、わが国の野球史に、書きとどめられている。早稲田大学の構内にあった安部球場の名は、彼の功績を記念して付けられたものであったが、つい先頃取り壊されてしまった。野球人としての安部磯雄の名は、あるいは次第に忘れ去られていくのであろうか。しかし、キリスト者にして、わが国の社会主義運動の先覚者であったという事実は消えることのない足跡として、いつまでも歴史に刻されることであろう。それとともに、彼が先駆的な死刑廃止運動家であったこともまた忘れてはならないことの一つである、と言挙げしておきたい。

## 一 死刑廃止運動における行実

明治三十四年五月十八日、安部磯雄・木下尚江・河上清・西川光次郎・幸徳伝次郎・片山潜ら六名の人々によって、社会民主党が結成され、その宣言文が翌々二十日付けの「労働世界」第四十七号や他の二三の新聞に掲載された。その結党の宣言は、後年「其文章の雄大なる、其説明の周到なる、政党の宣言として稀にみる所」<sup>1</sup>と石川旭山の賞揚しているところであり、大河内一男も「苦心の長文で委曲をつくし、諄々として説くの観がある」<sup>2</sup>と述べている。

社会民主党宣言は、これを、「如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは実に二十世紀に於けるの大問題なりとす」と書き始めて、

- 「1 人種の差別異動に拘らず、人類は皆同胞たりとの主義を拡張すること
- 2 万国の平和を来す為には先づ軍備を全廃すること。
- 3 階級制度を全廃すること」

などの八か条の理想を掲げ、次いで、その理想の実現のために、二十八項にわたる綱領を示して、実際の運動を期した。綱領の二十四番目に掲げられたのが、「死刑を全廃すること」という一項である。

宣言は、綱領に列挙した事項に関して、それぞれその論拠を詳細に説明しているのであるが、なぜ死刑を廃止しなければならないかという点については、具体的な説明はしていない。同党の主張する社会主義・民主主義の必然の帰結というのであろうか。ともあれ、政党がその綱領において死刑の廃止をうたったのは、画期的なことであると言ってよい。

安部磯雄がこの宣言を執筆したことは数書に見えている。社会民主党に加わったすべての人々が死刑廃止論者であった、とまでは言えぬかもしれないが、宣言の直接の執筆者である安部磯雄が死刑廃止についての鞏固な信念を抱いていたことは確かであろう。安部は、トルストイの影響を受けた。明治二十四年から三年間アメリカに留学したが、その間「トルストイの書物を可なり多く読んだ。然しこれは彼の小説ではなく、宗教と平和に関する著書のみであった。これを培養して花を咲かせて呉れたのは確かにトルストイであった」と自伝にも記している<sup>3</sup>。あるいは死刑廃止論についても、その感化によるところがあったのかもしれない。しかし、トルストイが、死刑廃止を訴えた『予は黙するに能はず』を書いたのは、明治四十一年のことである。社会民主党の死刑廃止宣言が、トルストイの影響を受けたものであるか否かは定かではない。

五月十九日、社会民主党は、神田警察署に結社の届出をしたが、翌二十日その解散を命じられた。政府側の内意として、軍備全廃、人民の直接投票、及び貴族院廃止の三項を削除すれば、承認しようとの打診があった

<sup>1</sup> 石川旭山『社会主義運動史』（明治40）

<sup>2</sup> 大河内一男『黎明期の日本労働運動』岩波新書（昭和27）

<sup>3</sup> 安部磯雄『社会主義者となるまで』（昭和7）

が、これを拒否したと伝えられている。その後六月に至り、同党の面々は、党名を社会平民党と改め、綱領も改めて再び所轄警察署に届け出をしたが、これも即日禁止されてしまった。

[出典]

『労働世界』79号(明治34)。『資料日本社会運動思想史(第三巻)』(昭和43)、『明治文化全集第6巻(社会篇)』(昭和42)所収

## 二 その生涯の大略

安部磯雄は、慶応元年二月四日、黒田藩士岡本権之丞の次男として福岡市新大工町に生まれた。当時、祖父は郡奉行、父は馬廻り頭であって、二百石の碌を得ていたということである。小学校を終えた後しばらく漢学塾に学んだが、義兄の勧めにより同志社に進んだ。同校に入学中、瀕死の重患にかかり、これを機に熱心なキリスト教徒になった。彼は、その自伝において、自分が社会主義者になった原因として、「明治維新の改革により比較的安楽な生活から急転直下貧乏生活に墜落したこと」及び「京都同志社在学中基督教的博愛主義の感化を受けたこと」の二つをあげている。

明治十七年同校卒業後、同校教師・岡山教会牧師などを経て同二十四年アメリカにわたりハートフォード神学校に学び、次いでベルリン大学に学んで、明治二十八年に帰朝した。彼は留学中各地の社会事業施設を視察しているうちに、社会事業によって社会の貧乏を根絶することの不可能なるを感じつつあったところ、偶然ベラミーの小説「ルッキング・バックワード」<sup>4</sup>を読み、豁然と社会問題解決の方法を会得するに至ったという。明治二十六年の夏のことである。彼は後年、同志社在学中に聴いたラーネット教授の講義の筆録の中に、すでに「社会主義」なる語が用いられていることを見出すのであるが、それは必ずしも記憶されてはいなかった。

安部磯雄の帰朝は、大洪水に襲われた岡山教会の復興のために呼び戻されたものであったが、その再建を果たし、明治三十年に同志社教授に迎えられたものの、明治三十二年東京専門学校(早稲田大学の前身)教授に転じた。

すでにユニテリアン協会に属し、キリスト教的社会主義の立場から社会主義を唱えていた安部磯雄は、明治三十年高野房太郎らにより結成された労働組合期成会に参加してその評議員になった。明治三十一年には、片山潜・木下尚江・幸徳伝次郎・村井知至らと社会主義研究会を組織し、明治三十三年これを社会主義協会と改称するとともにその会長になり、更にユニテリアンの機関誌『六合雑誌』の編集をも引受け、爾来さかんに社会主義の宣伝を行なうようになる。

しかくして前記の社会民主党宣言に至ったのである。日露戦争に際しては、一貫して非戦論を貫き、社会主義協会が解散させられるや、明治三十八年木下尚江・石川三四郎らとキリスト教社会主義を標榜する『新紀元』を発行し、あるいは『平民新聞』を支援したりしていたが、大逆事件を契機として一時期社会主義運動から退いた。

明治三十六年に早稲田大学に野球部を創設し、三十八年には同野球部を率いて渡米し、本場において七勝十九敗の成果をあげたのであった。また、四十四年には嘉納治五郎らとともに大日本体育協会を創設した。

その後、大正十三年日本フェビアン協会会長、大正十五年労働農民党顧問、同年社会民衆党中央執行委員長、昭和七年社会大衆党中央執行委員長等の要職に就いて、無産政党的領袖として政界に活躍した。第一回

<sup>4</sup> 『顧みすれば』 岩波文庫(昭和28)は、その邦訳である。

の普通選挙以来衆議院議員に当選すること四回、昭和十五年斎藤隆夫議員の除名問題に端を発して代議士を辞するに至った。敗戦後は社会党の顧問に推されたものの、昭和二十四年に逝去、行年八十五であった。

後年の宰相片山哲が恩師と仰ぐ人物でもある。

その著書は数多く、

『社会問題解釈法』東京専門学校専門部(明治34) [『明治文化資料叢書第五卷(社会主義篇)』所収]

『地上の理想国瑞西』平民社(明治37)

『理想の人』梁江堂(明治39)

『野球案内』(明治40) [『明治文化資料叢書 第十卷(スポーツ篇)』所収]

『社会問題概論』早稲田大学出版部(大正13)

等々がある。

### 三 余語録

安部磯雄が、社会民主党宣言のそれ以外にも死刑問題についてなんらかの発言をしているか否かについて筆者は知らない。大逆事件において身近にいた何人かの人達が死刑だったのであるから、関連してのものもあるのかもしれない。また、その後の長年の政治活動の中で政党綱領等に「死刑廃止」を採用させようと動いたか否かも知らない。それらについては、有識の方々の御教示に預かりたいと願っているのであるが、ともあれ、即日解散を命ぜられた政党であるとはいえ、明治三十四年という時期に、政党の綱領中に「死刑を全廃すること」と規定させたことは死刑廃止運動史における貴重な史実であろう。

山口孤剣が安部磯雄について書いた文章がある。「丸刈の頭にふくよかな両の頬、一目眇して、平忠盛か、伊達政宗でもみるやうに、何時でも背広服一枚で押し通す彼は、元来組合の牧師で同志社の教師であったが、新神学を信じてユニテリアンの人となった。彼がトルストイ主義の無抵抗論者であることは久しい(中略)、彼は長く早稲田の先生でベースボール以外に何の道楽もない。詩を解せず歌を解せず、極く散文式の人であるが、市政問題に通じて都市社会主義の知識においては注目すべき一人である」。大正八年に発表された『社会主義運動史』の一節である<sup>5</sup>。

<sup>5</sup> 『資料日本社会運動思想史(第六巻)』(昭和43)